

## メッセージアウトライン 創世記31:1～55「故郷への脱出」

[1-2] 「ところで、ヤコブはラバンの息子たちが、『ヤコブはわれわれの父のものをみな取った。父のもので、このすべての富をものにしたのだ』と言っているのを聞いた。ヤコブがラバンの態度を見ると、はたして、それは彼に対して以前のようではなかった」

このラバンの息子たちはヤコブが来たときはまだ小さかったか、あるいはその後生まれたのであろう。ヤコブは義理の兄ということになるが、その彼に対してこんなきついことを言う。「みな取った」は誇張であるが、主なる神の祝福によってヤコブの取り分となる家畜がどんどん増えていったことへの<sup>わた</sup>妬みもあったであろう。ラバンも口にこそ出さないが、息子たちと同様に考えていることはその態度でわかる。

[3] 「主はヤコブに言われた。『あなたが生まれた、あなたの父たちの国へ帰りなさい。わたしは、あなたとともにいる。』」

ヤコブがメソポタミアのパダン・アラムの叔父ラバンのもとに逃げてきてからもう二十年が過ぎていた。→41節　そして二十年が過ぎ去ったこの時に、主は彼に彼が生まれた故郷のカナンの地へ帰りなさいと言われたのである。彼はもう十分にラバンのもとで働いた。そしてついに故郷へ帰る時が来たのである。「わたしは、あなたとともにいる」主は彼とともにいると約束してくださっている。今までもいてくださったが、これからもともにいて守り、導き、祝福してくださるのである。

[4-9]　それで、ヤコブは妻たちを自分のいる野に呼び寄せて事の次第を説明した。野に呼び寄せたのは話を他の者に聞かれないための配慮であろう。その話の内容は、ラバンは報酬を幾度も変えた。初めはぶち毛も縞毛も斑毛も生まれたものはヤコブのものになるという約束であった。ところが主の祝福によってぶち毛も縞毛も斑毛もどんどん増えていくので、ぶち毛だけにするとか、斑毛だけにするとかラバンは次々と約束を変えたのであろう。しかし、いくら条件を変えても事態はヤコブに有利になるように運んでいく。それでラバンは、これらはすべて神のみわざであることを認めざるを得なかったであろう。

「こうして神は、あなたたちの父の家畜を取り上げて、私に下さったのだ」(9)　これがヤコブに理不尽な扱いをしてきたラバンへの神のさばきであった。

[10-13]　ここで言われていることは3節で言われている主のヤコブに対する呼びかけの具体的な内容であろう。彼は夢の中で雌やぎと交尾している雄やぎは縞毛、ぶち毛、斑毛ばかりであるのを見た。すなわちこれらの産むものはすべてヤコブのものとなることが示されており、さらにラバンがヤコブに対してしてきたことはすべて主が見てご存じであることも伝えられた。主はすべてご存じなのである。

「わたしは、あのベテルの神だ。あなたはそこで、石の柱に油注ぎをし、私に誓願を立てた。さあ立って、この土地を出て、あなたの生まれた国に帰りなさい」(13)　かつて、

ヤコブが兄エサウの怒りを逃れて叔父ラバンのもとへ行く途中、ベテルで主が現われ、「わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る…」(28:15) と祝福の約束をしてくださった。それで彼は自分がそこで枕にした石を取ってそれに油を注ぎ誓願を立てたのであった。(28:18~20) そして今、主はその祝福を思い出させるかのように、ご自分があのベテルの神であることを示し、自分の生まれた国へ帰りなさいと言われ、以前の約束を果たそうとされるのである。

[14-18] ヤコブのことばを聞いたラケルとレアもこれに同調し、<sup>きゅうぎょ</sup>急遽彼らは荷物をまとめ、すべての財産や家畜、家族、しもべたちを連れてカナン<sup>カナン</sup>の地にいる父イサクのところに出発した。その準備のためには一日か二日あれば十分であっただろう。もともと彼らは羊飼いであったので移動には慣れていた。

[19]「そのとき、ラバンは自分の羊の毛を刈りに出ている。ラケルは、父が所有しているテラフィムを盗み出した」

羊の毛を刈り取るのは羊飼いににとって最も重要な仕事のひとつ。またこれは農夫の収穫のように祝いの時でもあった。ラバンの群れはかなり離れたところにいたのであろう。ヤコブの脱出のためにはちょうど良い機会であった。彼もあらかじめこの時と決めていたのであろう。この時、彼の妻のラケルは父の所有のテラフィムを盗み出した。このテラフィムは当時メソポタミアから各地に広がっていた偶像でまじないのためによく用いられ、ラバンの家の家庭神として祀<sup>まつ</sup>られていたと思われる。ラケルがこのような行為をしたのは、テラフィムを持っていれば親の財産の相続権があると考えたのかもしれない。しかし、もし彼女がそのような考えていたのなら、それは大いなる思い違いで、人間の作り出した偶像の神には何の力もなく、かえってまことの神ののろいや怒りを招くものであることを知らなければならない。→出エジプト20:3-5

[20-21]「ヤコブはアラム人ラバンを欺いて、自分が逃げるのを彼に知られないようにした。彼は自分のものをすべて持って逃げた。彼は立ち去ってあの大河を渡り、ギルアデの山地のほうへ向かった」

ヤコブの一族の逃走は秘密裏に行われた。これは当然であろう。前もってラバンに相談することではない。「ギルアデ」はガリラヤ湖と死海を南北に結ぶヨルダン川の東側の地である。

[22-23]「三日目に、ヤコブが逃げたことがラバンに知らされた。ラバンは身内の者たちを率いて、七日の道のりを追って行き、ギルアデの山地でヤコブに追いついた」

ここはもうメソポタミアから400キロメートルも離れた地である。3日+7日=10日間の旅でヤコブの一行はここまで来ていたのである。

[24] ラバンがヤコブに会う前に神は夢でラバンに語りかけられる。「あなたは気をつけて、ヤコブと事の善悪を論じないようにしなさい」神はヤコブを守るために直接ラバンに干渉された。これはヤコブを厳しくとがめたり、戻るように強いてはならないという意味で語られたのであろう。

[25-27] 追いついたラバンの一行は、ヤコブたちと同様にギルアデの山地に天幕を張った。そしてついにラバンはヤコブに語りかける。「ラバンはヤコブに言った。『何とということをしたのか。私を欺いて、娘たちを、剣で捕らえられた者のように引いていくとは。なぜ、あなたは逃げ隠れて私を欺き、私に知らせなかったのか。タンバリンや豎琴で喜び歌って、あなたを送り出しただろうに。』」

ラバンの怒りは、娘たち、孫たちを誘拐された父親のことばのように一方的に被害者の立場を強調する。しかし、そのような行為をヤコブが取らなければならなかった原因が自分であるということラバンはまったく棚に上げている。しかもラバンが喜び歌って送り出したかどうかは全く疑問である。

[28] 「しかもあなたは、私の孫や娘たちに口づけもさせなかった。あなたは全く愚かなことをしたものだ」

ここには父親としての心情が含まれていることは確かである。しかし、愚かなことをさせたのはラバンなのである。

[29] 「私には、あなたがたに害を加える力があるが、昨夜、あなた方の父の神が私に、『あなたは気をつけて、ヤコブと事の善悪を論じないようにせよ』と告げられた」

ラバンは身内の者たちを率いて来ていたので確かにそれだけの力はあったであろう。しかしそれはすでに神によってとどめられているので、ここでは単に強がりのことばでしかない。

[30] ヤコブが出て行くのはヤコブの神の干渉があったから許すとしても、なぜ私の神々すなわちテラフィムを盗んだのかとの問い。

[31-32] まずヤコブは自分が黙って逃げたのは、もし前もって相談するようなことをすればラバンが娘たち、つまり彼の妻のラケルやレアを奪い取りはしないかと思って恐れたからと言う。(31) 次にラバンの神々をだれかのところで見つけたら、その者を生かしてはおかないと断言する。(32) もちろんヤコブはラバンの神々は生ける真の神ではないということを知っていただろう。そもそも盗まれるくらいだから何の力もないのである。しかし、彼はラケルがそれを盗んだのを知らなかった。知らない者の強みであるが現実には最愛の妻がそれを持っているのである。

[33-35] ラバンはヤコブの「ご自分で調べてください」とのことばを受け、ヤコブの一族の天幕をしらみつぶしに探すが見つからない。ラケルの天幕にも入るが、ラケルは生理痛を理由に動けないことを述べるが、その彼女の座っていたらくだの鞍の下にテラフィムは隠してあった。それゆえラバンは見つけることができなかった。

[36-41] それゆえ今度はヤコブのほうで猛烈な抗議を始める。「私にどんな背きがあり、どんな罪があるというのですか。私をここまで追い詰めるとは。あなたは私の物を一つ残らず調べて、何か一つでも、あなたの家のものを見つけましたか。……」ラバンのもとに来てからの二十年間の労苦、ラバンの群れの雌羊も雌やぎも流産させたこともなく、野獣にかみ裂かれたものは自分が負担し、盗まれたものの責任を負わされ、昼は暑さに、

夜は寒さに悩まされて眠ることもできなかったこと、何度も何度も報酬を変えられたこと…。これらの理不尽な取り扱いを取りあげて、ヤコブはラバンに迫る。

[42]「もし、私の父祖の神、アブラハムの神、イサクの恐れる方が私についておられなかったなら、あなたはきっと何も持たせずに私を去らせたことでしょう。神は私の苦しみとこの手の労苦を顧みられ、昨夜さばきをなされたのです」

ヤコブはラバンのさまざまな過酷な取り扱いにもかかわらず、アブラハム、イサクの神が彼についておられ、昨夜さばきをなされたと言う。それは神が夢でラバンに現れて、「あなたは気をつけて、ヤコブと事の善悪を論じないようにせよ」と言われたことであろう。それゆえ、もうこれ以上ラバンがヤコブを責めようとしても無理なのである。

[43-44]「ラバンはヤコブに答えた。『娘たちは私の娘、子どもたちは私の子ども、群れは私の群れ、すべてあなたが見るものは私のもの。この私の娘たちに対して、または、娘たちが産んだ子どもたちに対して、今日、私が何をするというのか。さあ今、私とあなたは契約を結び、それを私とあなたとの間の証拠としよう。』」

ヤコブの強いことばはラバンに反論の余地を残さなかったが、それでも彼は強がって、ヤコブの持つすべてのものは自分のものであると強調する。これこそ、ラバンの心の一番深いところに横たわっている基本的な考え方なのであろう。人間というものは、ここまで自己中心になれるのである。そして彼はこのような考えかたを背景としてヤコブと契約を結ぼうとする。ヤコブにしてもラバンの怒りをそのままにして去るのではなく、平安のうちに帰ることができるのなら、この契約に反対する理由はない。

[45-46] そこでヤコブは自ら石を取って、これを立てて石の柱とし、さらに自分の一族に命じて石を集めさせ、それで石塚を作った。こうしてラバンとヤコブは石塚のそばで食事をした。この食事は両者が契約に合意したということの証となる。

[47]「ラバンはそれをエガル・サハドタと名づけたが、ヤコブはこれをガルエデと名づけた」

「エガル・サハドタ」(アラム語)、「ガルエデ」(ヘブル語)ともに「証しの塚」という意味。

[48]「そしてラバンは言った。『この石塚は、今日、私とあなたの間証拠である。』それゆえ、その名はガルエデと呼ばれた」

石塚を作ることによって目に見える証拠、記念碑としての意味を持たせたのである。ガルエデはギルアデの語源とされている。

[49]「また、それはミツパとも呼ばれた」 「ミツパ」は「ツァファ(見張りをする)」の派生語で見張りの塔の意。

「われわれが互いに目の届かないところにいるとき、主が私とあなたの間の見張りをされるように」

ここにラバンのヤコブに対する不信の気持ちが表れている。

[50]「もし、あなたが私の娘たちをひどい目にあわせたり、娘たちのほかに妻をめとった

りするなら、たとえ、だれもわれわれとともにいなくても、見よ、神が私とあなたの間  
の証人である」

ラバンはどこまでもヤコブを信用していなかったようである。ヤコブも疑り深い性格  
であったが、ラバンはその上をいく人物であった。ヤコブが彼のもとで二十年も忍耐し  
たということは、彼の人格と信仰の訓練のため、また兄や父をだましたことのさばきの  
ために必要で十分な時であったのだろう。

[51-53] ラバンはこの石塚と石の柱を証拠として、それを超えてお互いに行き来をしない  
ことを宣言し、ラバンとヤコブはお互いの神にかけて誓った。

「どうか、アブラハムの神、ナホルの神、彼らの父祖の神が、われわれの間をさばかれ  
るように」(53)

ナホルはアブラハムの兄弟であり、ラバンの祖父である。そして彼らの父祖の神とある  
ので、結局はヤコブの信じる神と同じかと思われるが、ラバンは偶像のテラフィムも神  
としているところから考えて、やはり多神教的な背景があったと考えられる。ヤコブと  
の誓いの手前、ラバンは彼の信じるいろいろな神の中から彼らの父祖の神を引き合いに  
出してきたのであろう。この点でも彼は純粋な唯一神信仰ではないことがわかる。

[54] 「ヤコブは山でいけにえを献げ、一族を食事に招いた。彼らは食事をして、山で一夜  
を明かした」

この食事は神をラバンとヤコブの誓いの証人とする厳粛な責任の承認を意味するもの  
である。

[55] 「翌朝早く、ラバンは孫と娘たちに口づけして、彼らを祝福した。それからラバンは  
去って、自分の所へ帰った」

このようにして、一つの大きな危険をヤコブは乗り越えることができた。この二十年  
間の出来事がヤコブには走馬灯のように脳裏に浮かんで来たのではないだろうか。ラケ  
ルとレアのための労苦、ラバンの家に仕えるための労苦、何度も報酬を変えられたこと  
の苦い思い。しかし、そんなヤコブに神はともにいて下さり、困難の中にも豊かな祝福  
を与え、多くの家畜、財産、子ども、使用人たちを増し加えてくださったのである。そ  
して、今ついにラバンとも別れ、故郷のカナンを目指してヤコブの一行は進んでいく。

世の人々と同様、信仰者の人生にも苦労が多いかもしれないが、それは天の故郷、神  
の御国へ行くために私たちが整えられ、試され、成長させられていくための役割を果た  
すのである。私たちも天の御国を目指しつつ、どんな時にも主なる神により頼み、信仰  
と希望をもって歩んでいかなければならない。→ヘブル11:6、ローマ8:31~39